チョイナ チョイナ

湯場に元気な掛け声が響きわたる
趣を失いかけた町が再興する物語（ストーリー）。

#草津温泉
#湯もみ

[温泉のまち・群馬県草津町] 群馬県北西部に位置する人口6,026人（令和5年7月1日現在）の町。北と西には三国山脈の2,000m級の山々がそびえ、一方、東と南は海抜約1,200mの高原となって開けている。日本列島のほぼ中央に位置しており、上信越高原国立公園に含まれる草津白根山周辺は太平洋と日本海の分水嶺。観光業を中心とした第3次産業が主要産業。

湯畑で有名な草津温泉街は、群馬県草津町の中心市街地に位置する。時代の変遷によって次第に温泉街としての情緒を失いつつあった町が、平成22年から行われた「景観まちづくり事業」によって姿を変えていく。他自治体の事例をもとに、まちづくりのあり方を考えてみたい。

「チョイナチョイナ」の掛け声で広がる硫黄の香り

「草津温泉」で有名な群馬県草津町。そのままでは少々熱い源泉を、約180センチメートルの木の板でかき混ぜ、成分を薄めずに温度を下げる明治期からの風習「湯もみ」。「チョイナチョイナ」の掛け声とともに行われる湯もみの模様は、草津温泉を象徴する湯畑広場に隣接する「熱乃湯（ねつのゆ）」で見学・体験できます。

その熱乃湯が、歴史と伝統を紡ぐ場として建て替えられたのは平成27年と、まちづくりの時間軸で考えればごくごく最近の話です。人口6千人余りながら、コロナ前で年間327万人を超える入込客数を記録する草津温泉。名実ともに草津ブランドを定着させたまちづくりの背景には、時間をかけた中・長期のプロジェクトの存在がありました。

失われつつあった「情緒」草津ブランド再興に向けた7年間

1990年代、湯畑広場周辺には、バブル崩壊とともに廃業したホテル・旅館が現れ、かつての「情緒」が失われつつありました。

来訪する観光客のためにと、湯畑広場のほど近くに約20年間設置されていた仮設駐車場。景観を乱すだけでなく、繁忙期には交通渋滞を引き起こし、温泉街を歩いて楽しむ観光客の危険の種になっていました。

こうした中、100年先を見据えた付加価値の高いまちづくりを目指し、景観まちづくり事業が平成22年からスタート。「時代の積層が感じられる街なみの保全」と、「温泉街の歴史をひも解きながら風情や情緒を残し、そしてよみがえらせながら新たな一颯（いぶき）と融和させる」という考えのもと、7年間にわたって再整備が行われたのです。

銀座の中心地に駐車場が必要か？

再整備に当たって、湯畑広場の一等地に位置する2つの駐車場を新たな名所に作り変えることになりました。計画当初、このことに関して「駐車場を移設したら湯畑に訪れる人が減ってしまう」という反対の声もあったそう。しかし、地域との協議を重ねることで計画どおり整備が進み、温泉街全体が少しずつ趣を取り戻していきます。時には、黒岩町長自ら「銀座の中心地に駐車場が必要でしょうか？」と関係者を説得したこともあったようです。

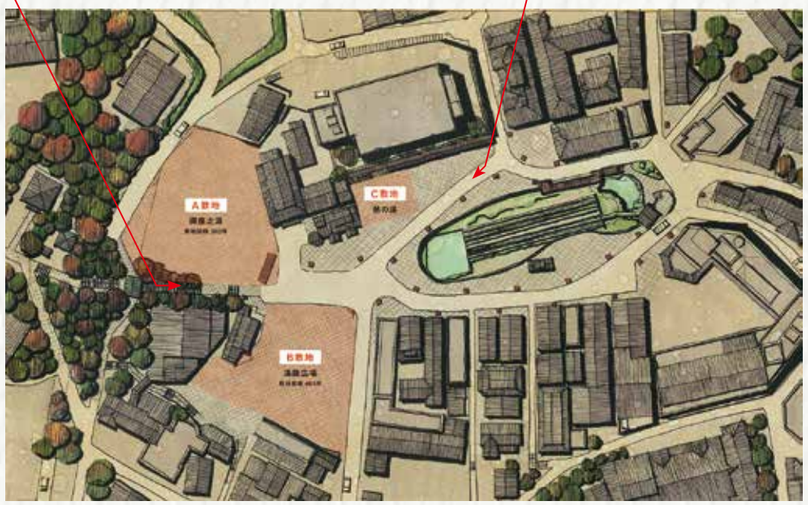
平成25年、駐車場跡地に共同湯「御座之湯（ござのゆ）」を再建し、木回廊と石畳

景観

[湯畑広場へ通じる坂道から見たかつての風景] 車、バイク、電柱、電線、看板…湯畑広場へ通じる坂道から視界に入るものは、趣のないものばかり。

渋滞

[渋滞するかつての湯畑広場] バイクや車が頻繁に往来するため、歩行者は危険と隣り合わせ。せっかくの観光も時に気を使わなければいけない場面が多かった。



[景観まちづくり事業で中心市街地を再開発] かつて老舗旅館があった2つの跡地（A敷地・B敷地）を長年、駐車場として活用。耐震化が必要だった熱乃湯（C敷地）の建て替えを含め、湯畑広場周辺に3つの拠点づくりを行う事業となった。